

なぜ理工系を選択する女性が少ないのか—文理の違いは

Why Female Students do not choose STEM?: Comparative Analysis with HSS

名大経¹ °隠岐さや香¹

Nagoya Univ.¹, °Sayaka Oki¹

E-mail: soki@soec.nagoya-u.ac.jp

本発表では人社系と比較して理工系を選択する女性が少ないという現象について、歴史的検証と近年の社会調査研究とに依拠しつつ考察する。

女性が大学に進学できるようになる前、18世紀末の西洋の人々は男性と女性の役割を補完原理と呼ばれる発想で捉えていた。この考え方は現代の私たちに残る偏見の祖型ともいえるものである。それによると、男性は抽象的で普遍的な原理を追求する営みに向いており一生の職業のために学問を学ぶべきで、女性は具体的で個別的な対象を扱う営みに向いており将来の伴侶となる人と子どものために教育を受けるべきとされた。

20世紀になり女性が高等教育に進学できるようになった直後、数少ない女子学生達の分野別分布は意外と偏りが少なかった。すなわち、理工系を選ぶ女子学生の割合は文学部等に進学する女子学生と比べても低くなかったのである。しかし20世紀後半になると、女子学生進学者は増えたがその中の理工系進学者の割合は減ってしまう。

同じ理工系でも傾向の違いがある。多くの国において数物系諸分野は女子学生が少なく、化学や生命科学、医療の分野では比較的多い。理工系に比較すると、人文社会系分野の方が社会における女性の進出と連動して進学者を増やしている。とりわけ20世紀後半には文学や社会学を選ぶ女性が顕著に増えた。ただし経済学など、抽象性が高く数学の使用が強調される分野は女子学生の増加傾向が低い。この傾向は博士課程など高度な段階ほど顕著である。

数学や自然科学系諸科目における男女の学力差は、PISAなど複数の国が参加した調査が示す限り、多くの先進国でほとんど存在しなくなっている。むしろ明確に示されるのは、それらの理数系科目に対する男女の間での自信の格差である。女の子は数学や科学に自信を持たない傾向が見られる。そのような自信喪失は、個人が生育環境の中で遭遇する意識的・無意識なバイアスとも関わりがあるだろう。

文化的規範が特定の分野との心理的距離に影響を及ぼしている可能性も高い。近年なされた複数の調査によると、複数の地域の人々が数学や物理に関わる語彙を女性性から遠いものと捉える傾向を持っている。また、伝統的に男性が担ってきた職能と近い分野には、無自覚のうちに男性中心的文化が存在する場合もある。このような文化的要素は、ジェンダー平等の問題とは別に、依然として個人の進路動向に対して強烈な影響力を持っている。

近年複数の国で進むジェンダード・イノベーションズの取り組みは、いわばこのようなアイデンティティの問題にも踏み込み、理工系の研究を多様な人に関っていく試みとも言える。